




からだ考

食べる   
つながる   
育つ 

## 命を学ぶ食農保育 (1) 命の保育をデザインする

倉田 新

### 1 今再びフレールベルに還れ

現在から半世紀以上前、日本教育学会初代会長の長田新先生は「科学に魂を賦与するため  
にフレールベルのあの精神に還れ」と言いました。日本の幼児教育がその幼児教育の原点を忘  
れ形骸化してはならないという警告です。日本のフレールベルといわれた倉橋惣三先生も、幼  
稚園真諦の冒頭で「フレールベルの精神を忘れて、その方法の末のみを伝統化した幼稚園を疑  
う」と言いました。フレールベルの偉大な功績は今日の幼児教育の原点として常に意識してい  
なくてはならない基本なのです。

現在、日本には約一万三千の幼稚園と二万三千の保育園があります。なぜどちらも園とい  
う名称が付いているのか、今一度考える必要があります。フレールベルは幼稚園に花壇や菜園  
や果樹園をつくり、幼稚園にはそれらを必ず設置すべきと主張しました。私たちはここに着  
目しなくてはなりません。近年の保育園は規制緩和が進行し、園庭が無くても近隣に児童公

園があればよいなどと認可の最低基準が大幅に変更されています。その結果、まるで宇宙船のように外部から遮断されたビルの中でも認可が可能になっています。児童公園を花畑や野菜畑や田んぼにすることは許されません。これをフレーベルの精神から考えると本当に園と言つてよいのでしょうか。既存の幼稚園や保育園でも同様のことがいえます。園庭があつても殺風景で硬く、花も木も植わっていない、平らで寂しく冷たい無味乾燥な園庭もあります。果たしてそれでよいのでしょうか。園庭を命の環境にする。それが食農保育です。

## 2 豊かな原風景を創造する

フレーベルは「人間教育の礎石がまず幼き魂の中に打ち据えられなくてはならない」と主張しました。間違いなく幼児期は人生百年を生きる土台なのです。

園庭も屋上も緑にあふれ積極的に食育・食農を取り入れ、豊かな温かみのある命の環境にあふれている保育園を取材した時の話です。ある日、十八歳くらいの女性が垣根から園庭をのぞいていました。畑作業をしていた園長が気付いて声をかけます。すると彼女は「園長先生！ 私居る？」と聞きました。園長は「居ますよ、中へお入り」と彼女を招き入れます。園の螺旋階段には創設からこれまでの卒園児の集合写真が貼られていました。彼女はじつと自分の写っている写真を眺めてから帰っていきました。それから二年後また彼女はやつて来ました。今度は赤ちゃんを連れてきます。そして告白します。実はあの時、自殺しようと思つてふらふら歩いていたこと。気が付いたら懐かしい園の前に立っていたこと。そして写真を見たら笑顔で写っている自分を発見したこと。それを見てまた生きたいと思つたこと。



そして今、結婚をしてかわいい子どもに恵まれて幸せになったこと。だから感謝の気持ちであいさつに來たと語ったのです。保育者は日々、子どもたちの心の中に原風景を刻んでいるのだという自覚を持たなければなりません。今、この瞬間にも子どもたちは刻んでいるのです。それは生きる力となります。どんな原風景がふさわしいか、もう一度目の前の園庭を見直してみる必要があります。

### 3 命は命からしか学べない

私は「命を大切にすることを育てる」ということが、保育・教育において最も崇高な根本原理であると考えます。命の尊さや創造性、そして自然への愛着や豊かな感性を育むために必要な体験として「生活の中で命とふれあひ命を育てる」ことが必要であり、命を大切にする心の発達は「命とのふれあひの質と量に比例していく」とも考えます。人は命ある環境の中で育つことで、はじめて命と出会うことができ、命は命からしか学べないと考えるのです。そのためには命の環境をイメージしてデザインしてつくっていくということが保育者には求められます。ロバート・フルガムは「人生の知恵は大学院という山のとっぺんにあるのではなく、幼稚園の砂場に埋まっていたのである」と言いました。どんなに室内の教育環境は優れていても、園庭の教育環境はどうですか？ 手が掛からない無味乾燥な園庭ではありませんか？ 園庭には命の環境がありますか？ 大型遊具やアスレチックで満足してはいませんか？ いくら摘んでも遊べるだけの草花が咲いて

#### 4 園庭は総合芸術

いますか？ 園庭の文化がまだまだ未成熟な園は多いのではないのでしょうか。

世界にはそもそも庭園文化というものがあります。それは自然を素材にし、さまざまな思想や意匠が入り、それを庭園という形に凝縮した総合芸術です。幼稚園の園庭も同じではないのでしょうか。園庭は現代の日本の子どもたちに残された貴重な自然空間です。庭に出て花壇の花の香りを感じ、摘んで飾ったり、戯れたりしながら自由で過ごす場所が身近な生活の場で再生されることが、今の日本の子どもたちには必要です。従来の運動場、遊戯場という概念を超えて新しい文化を創造するのです。

日本では生活の中に自然をうまく取り入れてきた文化があります。それは春夏秋冬の旬の恵みに満ちていました。しかし現代の消費文化社会において、そうした日本特有の食農文化が失われています。人の生活には必ず食があり、食は農を経由します。生産が見えにくい消費中心の生活をしている現代の子どもたちにとって、保育を通して畑作（稲作）や調理など食の生産の方向に生活を広げることは、未知の生活を創造していくものであるといえます。

芸術はイメージして創り出すものです。それは日本の農家の庭先でもよいですし、お洒落しゃれな英国のガーデンでもよいでしょう。保育こそ総合芸術です。保育者一人ひとりが話し合い、命の環境をイメージして、命の保育をデザインすることが大切です。日本の未来は保育者のその手のひらに肉刺まめを作るかどうかにかかっているのではないのでしょうか。

（東京都市大学）